

(英語版)

(アラビア語版)

(目次)

見果てぬ平和 ― 中東の戦後75年 (八十六)

第三章 アラーの恵み―石油ブームの到来 (二十二)

八十六 第一次オイルショック ― 石油を武器に！ (三一三)



戦況の推移を注視していたファイサル・サウジアラビア国王の下知を受けてヤマニ石油相が動いた。十月八日、OPECは欧米石油会社にテヘラン協定の改訂を申し入れ、それが拒否されると十六日にはGCC六か国はテヘラン協定を破棄し、原油価格を一方的に七十%引き上げると宣言した(クウェイト宣言)。産油国が価格の決定権を欧米の石油企業から奪い取った瞬間である。これ以降価格の支配権は産油国の手に移り、OPECが世界のエネルギーの覇者となる。

産油国の猛威はさらに続く。十七日にはOPEC(アラブ石油輸出国機構)が米国およびイスラエルの支持国に対して石油の供給を毎月五%ずつ段階的に削減すると世界に通告した。石油戦略の発動である。世界中の国々はアラブ産油国の予想もなかった行動に右往左往した。中でも石油をすべて輸入に頼り、しかもその大半をアラブ産油国に依存する日本の衝撃は大きかった。

その間、戦争はイスラエル優位に傾きつつあった。サダトの懸念が現実になり、彼は「時の氏神」が出てくることを期待しないわけにはいかなかった。二十二日に国連で停戦決議が採択され、二十五日に停戦監視の国連軍が編成さ

れるに及んで第四次中東戦争はようやく終結した。

産油国の石油戦略はその後もしばらく続いた。いわゆる「オイル・ショック」である。日本ではスーパーマーケットの棚からトイレットペーパーが消える騒ぎが発生した。

(続く)

荒葉 一也

E-mail: Arehakazuyai@gmail.com